View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kurume University Institutional Repository

ストレングスアプローチにおける小学校教師の学級雰囲気に対する認識の変化

著者	森岡 育子，近松 正孝，渡辺 良子，山本 眞利子
雑誌名	久留米大学心理学研究
巻	10
ページ	72-76
発行年	2011-03-31
URL	http://hdl.handle.net/11316/506

Kurume University
Psychological Research 2011, No. 10, 72-76

原著

ストレングスアプローチにおける小学校教師の学級雰囲気に対する認識の変化

森　岡　育　子[1)]，近　松　正　孝[1)]
渡　辺　良　子[1)]，山　本　眞利子[2)]

要　約

子どもたちは，学校生活の中で他者との密接な，そして複雑な関係の中で成長をしていく。しかし近年，他者関係が子どもたちのストレッサーの１つであることや，自他への肯定感の低下もしくは欠如が現代の子どもたちの特徴であることが指摘されている。本研究では，子どもたちが学級の中で自他の良さ，長所であるストレングスを見つけ，お互いを肯定的に捉え合うことを目的に，小学５年生の１クラス（男児 17 名，女児 16 名）を対象に 2010 年１月 27 日から同年２月 25 日の期間にストレングスアプローチを実施し，教師の学級雰囲気に対する認識の変化を調査した。その結果，プログラム実施後において，学級雰囲気尺度の「認め合い」，「意欲」，「楽しさ」の３項目で得点が増加した。また，教師の自由記述においても１人１人の子どもや学級全体を肯定的に捉える記述が多くなっていた。これらのことから，自他の良さを見つけ合うストレングスアプローチが学級雰囲気に改善をもたらし，教師の学級に対する認識の変化につながったことが示唆された。

キーワード：ストレングス，学級雰囲気，教師の認識

問 題 と 目 的

子どもたちは，学校生活の中で同級生たちと密接な，あるいは複雑な他者関係を経験していく（遠藤ら，2007）。そして，その他者関係は主に「学級」という集団において経験される。しかし，他者関係は時として大きなストレスとなり，子どもたちが不適応行動を起こす原因になることもある。長根（1991）は，児童を対象としたストレッサーについての調査で，「友だちとの関係」，「授業中の発表」，「学業成績」，「失敗」の４因子を抽出し，他者関係が小学生のストレッサーの１つであることに言及している。また，谷尾ら（2001）は，小学生の日常的ストレスとして，「友だちとうまくいかなかった」，「自分が言ったことや行動で他人をがっかりさせた」，「自分の失敗ではないかと恐れた」があり，最も影響が強かったのは「誰かにいじめられた」という項目だったことを報告している。

一方，子どもたちの多くは，数人の特定の他者と友人関係を築いたり，学級集団の中で仲間意識を形成したりなど他者とのかかわりを通して成長していく。他者との良好な関係を構築するためにはソーシャルスキルや感情のコントロールが重要なことが示唆されている（小林，2003）。また，適度に自己受容している人は対人関係が円滑に進められること（加藤，1977），自己肯定感の高い者は学校不安が生じにくいこと（竹田ら，2003）が明らかにされている。小学生を対象とした研究では，久芳ら（2006）が，友だちとの「積極的かかわり」が自己肯定感と大きく関連していることを報告している。

しかし，現代の子どもたちの特徴として，自分と他

1）久留米大学大学院心理学研究所
2）久留米大学

者とを肯定的に捉えられないという，自他への肯定感の低下もしくは欠如が指摘されている（尾木，1998）。松尾（2001）は，中学生を対象とした調査で，自分と他者とを価値があると捉えられない者は，人とのかかわりを避ける傾向が強く，また攻撃的行動への志向性が強いことを明らかにしている。

そこで，自他の良さ，長所であるストレングスを見つけ，互いを肯定的に捉え合うことを通して学級集団の雰囲気が良くなることを目的として，本ストレングスアプローチを計画し，実施した。

方　　法

1）対象者

N県A小学校5年生1学級33名（男児17名，女児16名）の教師1名。

2）実施期間

2010年1月27日～2010年2月25日。

3）手続き

1ヶ月間プログラムを実施し，その前後で教師に質問紙に回答してもらう。1ヶ月間のプログラム終了後，学級において振り返りの会を行う。

4）ストレングスアプローチプログラム

① 児童はカード（図1）の表に自己紹介文を書く。
② 教師がカードを回収し，児童に無作為に配布する。
③ 児童はカードに書かれた相手を1週間観察し，自分と違って良いところ，自分と同じで嬉しいところなどのストレングスを探し，ストレングスカードの裏に書いていく。
④ 児童はシール係にストレングスカードを持って行き，見つけたいいところの数に応じてシールをもらい，自分のシート（図2）に貼る。
⑤ ストレングスカードは，相手のシートに貼ってあげる。

①～⑤の1週間が1サイクルとなり，これを1ヶ月間で4サイクル行う。教師は，各個人のシートを観察し，「たくさん見つけたね」や「すごいね」などのシールを貼る。

5）質問紙

（1）学級雰囲気尺度

三島・宇野（2004）が作成したものを使用した。質問は34項目で，Ⅰ認め合い，Ⅱ規律，Ⅲ意欲，Ⅳ楽しさ，Ⅴ反抗の5因子で構成されている。回答は4段階評定（全然あてはまらない～よくあてはまる）で，プログラム実施前（1月下旬）と実施後（2月下旬）の2回，担任教師に回答を求めた。

（2）教師の見方

「先生自身の子どもに対する思い（見方，捉え方など）」「先生自身の学級全体に対する思い（見方，捉え方など）」について，学級雰囲気尺度と同じくプログラ

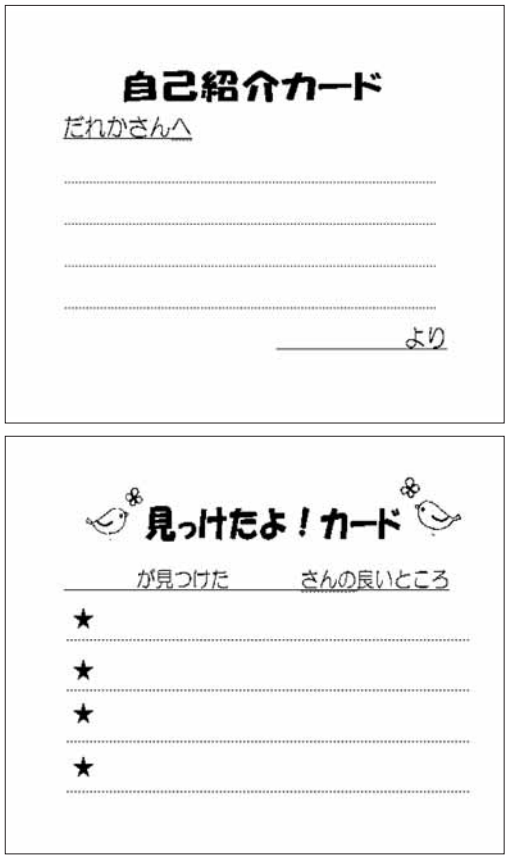

図1　ストレングスカード（表裏）

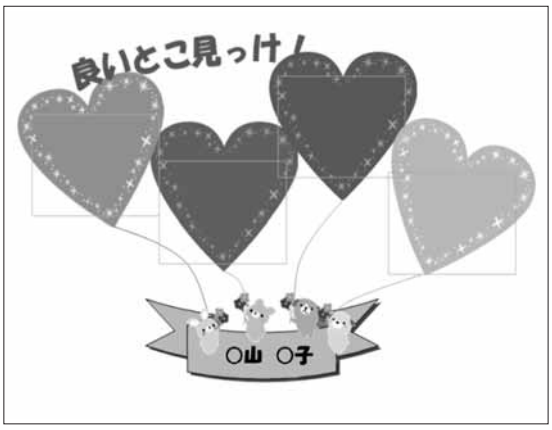

図2　「ストレングス見っけ！」シート

ム実施の前後２回，担任教師に自由記述で回答を求めた。

結　　果

1）学級雰囲気尺度

４週間の活動による子どもたちの変化を「学級雰囲気尺度」により評価した結果を表１に示す。

下位尺度では，「認め合い」，「意欲」，「楽しさ」に増加が見られた。

一方で「規律」，「反抗」には，前後で変化が見られなかった。

2）教師の認識（自由記述）

担任教諭の自由記述を表２・３に示す。

考　　察

1）学級雰囲気尺度

プログラム実施前後を比べて，教師による学級雰囲気の認識において，実施後の得点が増加した項目は「認め合い」，「意欲」，「楽しさ」の３つであった。中道（2002）によれば，学級内で承認されている，自分の居場所があると認識している児童は，自己肯定感が高く，対人関係も良好であると捉えていることが報告されているが，本プログラムの実施においても，他者を肯定的にみる目が養われ，お互いを認め合うことにつながったことが推察される。また，それにともなって，学習や運動などに対する意欲が高まるとともに，学級

表１　学級雰囲気尺度　結果

	pre	post
認め合い	18	20
規律	13	13
意欲	10	13
楽しさ	6	7
反抗	8	8
合計	55	61

表２　教師の子どもに対する思い（見方，捉え方など）

2010/1/27	2010/2/25
・子どもは，とても興味深いと思う。 ・たくさんの子に接して，たくさんの人生にかかわることができてうれしい。 ・困る子どももいるけれども必ず裏にはつらさがあってどうしようもできない背景にはがゆさを感じる	・家庭的なことが原因でおちつかない子どももずいぶんおちつきが出てきたように感じる。 ・転入してきて１ヶ月になる児童も学級の中にうまくとけこんでいる。 ・自分がしてもらってうれしいことを，まわりの人にもしてやろうという気持ちがみえる子もいる。

表３　教師の学級全体に対する思い（見方，捉え方など）

2010/1/27	2010/2/25
・明るく，素直な子が多い。 ・幼い部分も多くある。 ・根深いトラブル的なものはないがちょっとしたいたずらやちょっかいを出すことはある。 ・心から話をきいて感じる子が多い。 ・はめをはずすと，とめどなくさわがしい。 ・整列が苦手な子が多い。 ・この子達にとても愛情を感じながら毎日すごしている。	・学年末になり，まとまりもこれまでより見られる時頃ではあるが，ほんわかムードであると思う。 ・グループで活動するとりくみ（行事）や学習が多くあり誰とでもさっと協力できる姿勢がみられた。 ・だれのカードがくるかとても楽しみにしており，発見したことがありがとうシールになり，また自分のよさも形となって残っていくことにうれしさを感じているようであった。

全体の雰囲気が良くなってきているように見られる。

2）教師の認識（自由記述）

1. 子どもに対する思い

プログラム開始前は，子どもへの思いとして「子どもは大変興味深いと思う」,「たくさんの子どもの人生に関わることができて嬉しい」と，自分自身が全般的に持っている子ども感や職業に対する喜びが表されていた。また,「子どもの背景にある辛さにどうしようもない歯がゆさを感じる」ことが記され，やりがいとともにある種の無力感もうかがえた。

しかし，プログラム実施後には,「家庭的なことで落ち着かない子どもが落ち着いてきた」,「転入してきた子もうまく学級の中に溶け込んでいる」という記述があり，１人１人の子どもに対する肯定的な感情が述べられるようになっており，背景にある辛さにも負けずしっかりと生活している子ども達へ目が向けられている。また,「自分がしてもらって嬉しいことを周りの人にもしてやろうとする気持ちが見える」と具体的な記述の仕方に変わってきており，児童の言動に変化が生じ，それを担任教師が認識できていることを表わしていると考えられる。また，これは，学級雰囲気尺度の「意欲」が上がっていることにも関連していると思われ，本プログラムを実施することを通して，教師が捉える子ども達の姿および学級全体の雰囲気に変化がみられたことを示している。

2. 学級全体に対する思い

実施前は,「明るく，素直な子が多い」,「心から話を聞いている」などプラス面の評価と「幼い」,「ちょっとしたいたずらやちょっかいがある」,「整列が苦手」などマイナス面の評価が両方記述されている。プログラム実施後は「ほんわかムード」,「協力できる姿勢が見られる」, この取り組みに「嬉しさを感じているようだ」というように全てプラスの評価になっている。この記述は，学級雰囲気尺度の「認め合い」が上がったということにも関連していると思われ，教師が学級を肯定的に捉えるようになったことが推察される。

ま　と　め

本プログラムは，児童がお互いのストレングスを見つけ，認め合うことにより，学級全体の雰囲気の改善を図ることを目的として作成・実施した。今回は，実施前後に教師による質問紙と自由記述により評価を行い，教師が捉える学級雰囲気に改善がみられる結果を得た。今後は，児童自身の学級雰囲気に対する認識や学級満足度について，児童の自己評価により調査を実施し，自己肯定感と学級雰囲気に関する実態を明らかにすることが課題である。また，学級の雰囲気が良くなることによって，担任教師のストレスが軽減されるかということについても調査していきたい。

引　用　文　献

遠藤野ゆり・中田基昭　2007　学級集団における友人関係についての現象学的考察－他者経験の重層性の観点から－　日本教育方法学会紀要『教育方法学研究』 33 181-192.

加藤隆勝　1977　青年期における自己意識の構造　心理学モノグラフ　14　東京大学出版会.

久芳美恵子・齊藤真沙美・小林正幸　2006　小学生の自己肯定感と人とのかかわりとの関連について　東京女子体育大学紀要　41　13-24.

小林正幸・齊藤真沙美　2003　小・中学生の友人関係の認識と学校適応感との関連について(1)－友人関係の様式の性差・学年差　日本カウンセリング学会第36回大会発表論文集　131.

松尾直博　2001　中学生の自己価値・他者価値と社会的不適応との関係　東京学芸大学紀要１部門　52　111-114.

三島美砂・宇野宏幸　2004　学級雰囲気に及ぼす教師の影響力　教育心理学研究，52，414-425.

長根光男　1991　学校生活における児童の心理的ストレスの分析　教育心理学研究　39　182-185.

尾木直樹　1998　新しい「荒れ」と「キレる」子－自己肯定心情欠乏症－　犯罪心理研究　5　20-28.

竹田レイ子・倉戸ツギオ　2003　自尊感情が学校内不安に及ぼす研究効果　日本心理学会第67回大会論文集　1142.

谷尾千里・村松常司・吉田正・坂田利弘・佐藤和子・村松園江　2001　小学生の日常ストレスと対処行動に関する研究　東海学校保健　25(1)　13-21.

山本眞利子　2010　ストレングスアプローチ入門　ふくろう出版.

An elementary school's teacher's recognition change of class atmosphere based on strength approach

Ikuko Morioka (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)
Masataka Chikamatsu (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)
Ryoko Watanabe (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)
Mariko Yamamoto (*Department of Psychology, Kurume University*)

Abstract

Children develop through close and complex interpersonal relationships at school. However, it has been reported in recent years that interpersonal relationships are a stressor for children and that today's children are characterized by a decrease in or lack of a positive sense of self and others. In the present study, we implemented the strength approach for a fifth-grade class (17 boys, 16 girls) from January 27 to February 25, 2010, and investigated changes in the teachers' recognition of the classroom atmosphere with the objective of enabling children to find good points and strong points (strengths) about themselves and others and have positive perceptions of each other. The results showed that scores for the three items of "mutual recognition", "motivation", and "fun" on the classroom atmosphere scale increased following the program. In addition, positive descriptions of each child and the class overall also increased in the free response. These findings suggest that the strength approach, which enables individuals to find good points about themselves and others, improves the classroom atmosphere and leads to changes in the teachers' recognition of the class.

Key words: strength, class atmosphere, teacher's recognition